

全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.22 No.3・4
(通巻 No.78)
June 2016

目 次

[講演要旨]

- 日本における健康医療情報サービスの可能性
慶応義塾大学名誉教授 田村 俊作……………27
- 病院患者図書室とエンベディッド・ライブラリアン
司書・ヘルスサイエンス情報専門員 佐藤 正恵……………32
- 患者図書サービスはいまー医情報サービスの課題と可能性
「公共図書館における健康情報サービスの根つき方」
川崎市立宮前図書館 舟田 彰……………34

[参加記]

- 全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して
亀田総合病院図書室 関 和美……………38
- 全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して
多治見市図書館 中島ゆかり……………40
- 全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して
国立保健医療科学院図書館サービス室 宮澤 博子……………42

[コラム]

- 「子どもには、ほんとうの生命を」
国立富山病院 院長 嶋 大二郎……………45

〈講演要旨〉

日本における健康医療情報サービスの可能性

慶應義塾大学名誉教授

田村 俊作

1. 図書館の価値

図書館の利用者サービスをずっと調べてきて、最近は特に「図書館の価値」というものに関心を持っている。

経営学では、製品やサービスの価値に対する考え方が変わってきていると言われている。それはバリューチェーンからバリューコンステレーションへの変化とか、価値付加モデルからネットワーク型価値創造モデルへの転換とかいわれるものである。

ここでバリューチェーン（価値付加）モデルというのは、製品の価値を、原材料からはじまって、加工の過程で徐々に付け加えられるものとする考え方である。例えば自動車の生産から販売の過程などを考えればわかるとおり、製造・流通の各段階で人手がかけられるたびに価値が加えられたと考えるこのモデルは大変わかりやすく、長い間製品やサービスの価値を考える際の基準となってきた。

これに対しバリューコンステレーションでは、価値はバリューチェーンのように累積してゆくものではなく、顧客を含む関係者間で協同的に産み出されてゆくものとされる。顧客の注文を受けて組み立てがはじまるPC直販サイトや、オープンソース・ソフトウェアの開発方式などを思い浮かべると、バリューコンステレーションの発想に立った製品・サービスのイメージがつかめるかもしれない⁽¹⁾。

協同的で柔軟な価値創造観が登場してきた背景には、顧客の側のニーズが多様化したことと、情報通信技術の飛躍的な発達により、企業間の迅速で活発なコミュニケーションに基づく柔軟な連携と、それを通じて多様で迅速なサービス・製品の調達が可能になったことがある。社会環境の変化が新たな価値観に基づくビジネスの形態を生みだし、さらに、その動向を説明し推進するモデルや理論が生み出されている。

同じようなことが図書館情報学の分野でも起きている。1980年代にテイラー⁽²⁾は図書館情報サービスにおける価値付加モデルを提唱したが、今日では連携による価値の協創が提唱されている⁽³⁾。連携により異なる分野の知識・経験を提供し合うことにより、単独ではできなかった新たなサービスの創出をめざす方向が出てきている。

2. 日本の公共図書館における価値の転換

こうした新しい価値の創造と価値観の変化は、わが国の公共図書館も経験している。今日の開放的な図書館しか知らない人には、1960年代以前の自習中心の図書館を想像するのは難しいかもしれない。資料の大多数は閉架であり、閲覧とは名ばかりで、利用のほとんどは自習であった。利用者は自習席を確保するために朝早くから行列を作った。つまり、空間の利用に価値を見出していたのである。

今日の公共図書館は、こうした1960年代までの公共図書館を否定して、資料提供中心の、誰でも気軽に利用できる、まちの読書施設としての図書館を実現している。つまり、開放的な空間の提供と、豊富な資料の提供に価値を見出すようになった。これにより日本の公共図書館が劇的な発展を遂げたことは皆の知るところだが、利用実績や予算などの点で、近年は停滞が目立っている。

こうしたまちの読書施設としての図書館には次のような問題がある。

- ・資料は豊富に揃えているが、資料にどんな豊かな中身があり、どんな可能性があるのかはほとんど教えてくれない。資料の中身にアクセスしようとしても、主題順に並べた書架排列と、著者やキーワードから探せるOPACくらいしか、一般の人が無理なく使えるツールがない。

- ・利用者への案内が不十分なため、CiNiiや日経テレコンなどツールはあるにもかかわらず、その使い方に習熟して、本の中身や雑誌記事を調べることや、その他のツールを駆使して情報を収集するのは利用者本人となってしまっている。レファレンスサービスがその役割を果たすのだろうが、日本に紹介されて100年も経つのにいまだにほとんど知られていない。

- ・一つの図書館で特定テーマの情報を網羅することは難しいため、図書館外の情報も利用する必要があるし、そうした館外情報と結びつくことで図書館所蔵資料の価値も高まるはずだが、多くの図書館は外部の情報の提供には消極的である。

- ・一方、貸出方式や予約制度の整備など、本の提供を軸に事業を組み立てることは習熟している。しかし、そのようにして構築・整備した資料提供の仕組みを、外部環境に応じてどのように展開してゆくべきか、といったことはあまり考えていない。本には固有の価値があるため、資料提供の仕組みを作れば、人々の知的自由を保障するという価値は自ずから作り出されていると考え、外の動きを見て新たな価値を常に作り続けるべきとは思っていない。これは典型的な価値付加モデルの考え方である。

近年になり、公共図書館の運営に対する考え方がまた変わってきているように思われる。まちの読書施設としての基本姿勢は維持しつつ、より豊かなくらしと地域づくりに多様に貢献することをめざす図書館が現われてきた。しごと、くらしの法律、健康と、生活のさまざまな領域に対して、入口となるような情報を提供したり、専門家・専門機関と出会う機会を提供する図書館が出てきているのである。先程のまちの読書施設としての図書館に対し、こうしたくらしと地域に多様に貢献することを目指す図書館の特徴とその実例は次のようにまとめられるだろう。

- ・図書館が持つ資料の可能性を引き出し、より活用するために、本の内容にまで踏み込み、その魅力・有用性を積極的にアピールしようとしている。

- ・図書館としてまちに貢献するという考え方から、まちに貢献するように関係者との協働により図書館を作る、というような発想の逆転も伴っている。

図書館がさまざまな領域への効果的な入口となり、さらに進んで専門的な情報を求めたり、相談を必要とする人たちをつなぐために、専門家・専門機関と連携している。その例に

は以下のものがある。

- ・長崎市立図書館は医療機関や県市の担当部局と連携して、棚作りから講演会、相談会、さらには「がんと向き合う サポートブック ながさき」の共同制作などの多様な健康医療情報サービスを提供している。連携を軸に新しいサービスを作り上げていった例と考えられる。同様の例に、紫波町図書館の農業支援サービスがある。

- ・千代田区立千代田図書館の出版検閲コレクションは、同館の長い歴史の中で蓄積されてきた図書群の中から、専門家と協力して関連資料を再発掘したものである。出版検閲史への貴重な貢献であるとともに、本の街神保町の図書館にふさわしい、図書館のアイデンティティの一角を形成するコレクションとなっている。

- ・愛荘町立愛知川図書館は、住民の協力の下に、たぬきマップやまち残しカードなど、自らまちの記録を作り出す活動、住区の新聞発行を支援する活動、住民が寄せた写真を基にした郷土史の作成など、まちの記録作りに積極的に関わっている。

3. 健康医療情報サービスにおける価値の協創

ここでは私自身が関わってきたこうした新しいサービス創造の試みを紹介したい。

私は長い間一緒に研究を続けてきた人たちと、2012年度から公共図書館における健康医療情報サービスのデザインに関する研究を続けている。それ以前はビジネス支援サービスをテーマとしていた。革新的なサービスが公共図書館で定着し、成果をあげるための条件を探ることが研究全体の目標で、ビジネス支援サービスとの共通点・相違点からアプローチすることを狙っている。さらに、個人的な理由になるが、研究生活の最後をこのテーマで終えたいという気持ちもあった。

この研究の中心的な論点の一つは、人々の役に立つ健康医療情報サービスを展開するためには、医療機関、医療関係者、自治体の医療担当部署との協働が不可欠であるということ、これは先に述べた、図書館から発想するのではなく、まちに貢献するように関係者との協働により図書館を作る、というように発想を逆転することが肝要である、との主張に基づいている。さらに、本研究自体、国立がん研究センターがん対策情報センターとの協働で進めることにより、医療者と図書館員の両者の視点から、健康医療情報サービスの現状とあるべき姿を探ることをめざしている。研究の一環として、図書館員と医療関係者との交流会や研修会を開催したほか、逗子市、堺市、北海道浦河町で連携プロジェクトを立ち上げている。

研究を通じて、次のような点に気付いた。

- ・鳥取県立図書館、埼玉県立久喜図書館、多治見市図書館、長崎市立図書館等、公共図書館の優れた実践が登場している。

- ・サービスの現場では、選書やサービスに関するノウハウが求められている（日本図書館協会等による2013年度の調査から）。

- ・医療と公共図書館はお互いのことをほとんど知らない。その点、病院患者図書室は医療と公共図書館をつなぐ大きな可能性を持っている。

各地の連携を見ると、公共図書館と病院患者図書室、大学医学図書館等、図書館同士の連携は、事業、サービス、目録等のインフラを共有しやすいため、連携は比較的容易なのに対し、病院との連携は、接点の設定から考える必要があるため、それなりの工夫と熱意が求められる。自治体の担当部門が参加して、自治体全体で健康問題に取り組む体制を組んでいるところもある。また、健康講座などの事業を共同で行なうなど、協働によるイベントの開催は、関係者相互の協力を密にする上で効果的である。

4. 病院患者図書室と価値の協創

研究を通して浮かび上がった病院患者図書室の強みと課題は次のようなものである。

- ・診療の場を離れたところで患者・家族の両者を見ることができる。患者・家族は、診療の場では言えなかったことを言ったり、見せられなかった表情を見せる。同時にまた、公共図書館などではなかなか尋ねられないようなことも尋ねてくる。そこで得られた知識と技能は、病院内にも地域にとっても、公共図書館にとっても有益である。

- ・一方、課題としては、病院患者図書室の運営形態とサービスがあまりにも多様で、また、さまざまな問題を抱えている。多様性は尊重すべきだと考えるが、そのために各自の課題に対処し全体の質を上げるのが難しくなっている点は問題であろう。また、未設置の病院も多く、医療側に理解のない（ように見える）場合が多い。

以上は関係者にとっては常識なのかもしれないが、病院全体の共通認識にはなっていないように見える。病院患者図書室の意義を伝えると共に、一定の水準が必要なことも理解してもらうことが必要であろう。

病院患者図書室の多様性はすでに運営マニュアル等で考慮されている。例えば、『患者医療図書サービス』（病院図書室研究会、2004）では、提供資料が医学専門書のみか娯楽図書混在型か、および、開設形態が独立型（常設のコーナーがある）、公開型（病院図書室を患者に開放している）、巡回型（ブックトラックで院内を巡回する）、開設型（院内のスペースを利用して定められた時間にサービスを提供する）のいずれかによって類型化している。

『病院図書室デスクマニュアル』（日本病院ライブラリー協会、2008）では、形態と運営として、病院主導の運営、NPO法人や市民団体と病院との協働運営、公共図書館の運営のいずれか、サービス対象は外来患者、一般病棟、小児科病棟、地域住民のどこまで含めるか、提供場所としては上記独立型、公開型、巡回型、開設型、さらに併設型（病院図書室に併設されているが、病院図書室の利用はできない）のいずれか、という類型化の観点が提示されている。さらに、資料については、一般向け医学・医療・健康図書、医学専門書、コメディカル専門書、闘病記、娯楽書、患者会資料、視聴覚資料、インターネット、パンフレットと詳細に区分している。

これらは病院患者図書室の多様性を理解する上で非常に有用な観点を提示してくれるが、協働による価値の協創という観点からは、さらに次のような観点も検討する価値があると考えられる。

- ・主導的な管理主体はどこか。院内横断的な独立の運営委員会が設けられていたり、病院

図書室の運営委員会が兼務する場合もあるが、病院図書室ないし医学図書館、事務部門、看護部などの医療（支援）部門、指定管理者や事務部門の管理下での委託、公立図書館などがある。しかも、医学図書館主導下での運営委員会による管理とか、公立図書館の分室扱いだが実際の管理は医学図書館とか、管理形態は非常に多様かつ複雑で、外部からは見えにくいとの印象を受けている。

・担当者もさまざまである。司書にしても医学図書館系もいれば、元公共図書館司書などそれ以外の人もある。司書資格はないが、他職種の勤務経験を持つ人もいる。看護師などのコメディカル、さまざまなボランティアが運営に関わることも多い。

運営環境と運営担当者の違いによって、選書やサービスに非常に多様性が生まれることになる。病院の方針に沿うものかどうか図書1点1点を評価しているところがある一方で、驚くような怪しい本を書架に並べているところもあった。医学図書館の経験者が担当しているところでは、病気や治療法等についての情報を求める質問に回答しているのに対し、看護師が担当しているところでは、治療や生活に関する相談を良く受けているということであった。

病院患者図書室の多様性を現実として受け入れるとき、なお、サービスにどのようなバリエーションがあり、それはそれぞれどのような条件の下で運営され、どのような価値が生み出されるのか、また、病院患者図書室としてふさわしい場合、ふさわしくない場合はどのようなものなのか等については、今後さらに検討してゆきたい。

4. 健康医療情報サービスの可能性

公共図書館が健康医療情報サービスに関わるのは、人が病気に備えるため、病気にうまく対処してより良い生活を送るためである。その考えをさらに進めてゆくと、地域の中で人々が自らの生死にどう対処するかを考え、主体的に生きる力を得る場となることが、公共図書館の目指す方向と考えることができる。しかし、公共図書館は健康医療に特化しているわけではないので、その持つ知識は浅くならざるを得ない。

一方、病院患者図書室のスタッフは、病院の中にあって主に患者や家族の方に寄り添うことにより、医学・医療・健康に関する知識はもとより、病院や患者・家族のことを理解している。病院患者図書室が公共図書館と関わることを通じて、両者が病院の、また地域の医療に貢献できるのではないか。現に鳥取県や多治見市で両者の協働がはじまっており、今後が期待される。

(注)

- (1) R.ノルマン;R.ラミレス, ネットワーク型価値創造企業の時代, 産能大学出版部,1996
- (2) Robert S. Taylor, Value-Added Processes in Information Systems, Praeger, 1986.
- (3) Maija-Leena Huotari & Mirja Iivonen, Knowledge processes: A strategic foundation for the partnership between the university and its library. Library Management, 26 (6/7): 324, 2005

〈講演要旨〉

病院患者図書室とエンベディッド・ライブラリアン

司書・ヘルスサイエンス情報専門員（上級）

佐藤 正 恵

本稿は、2016年2月6日（土）、日本図書館協会において開催された全国患者図書サービス連絡会講演会の内容をまとめたものである。

1. 地域包括ケアシステム時代の病院図書室と患者図書室

日本は世界に類を見ない高齢化社会を迎えようとしており、厚生労働省は日本の医療機関に対し、ベビーブーマー世代が後期高齢者を迎える「2025年問題」に向けたロードマップで、地域包括ケアシステムを構築し、各医療機関の役割明確化と在宅医療を推進している。

病院内の図書室は、医療法第22条により地域医療支援病院に設置が定められた共同利用施設であり、院内および地域の医療従事者に学術支援を行う役割がある。

また病院内に患者のための図書室（以下、患者図書室）を設置する動きが増加しているが、これは「がん対策基本法」により、がん診療連携拠点病院や自治体には患者への医療情報提供が義務付けられたことや、「健康増進法」制定、病院機能評価の評価項目として挙げられるなど、患者サービスへの視点が向上していること等の理由による。

病院図書室には、医療における1990年代からの根拠に基づく医療（EBM: Evidence based Medicine）推進の流れを受け、医療従事者や患者への科学的根拠のある情報提供が求められてきたが、一般市民にとっても、健康情報リテラシーの向上は喫緊の課題である。患者図書室運営ガイドラインとしては、国際図書館連盟（IFLA）による「IFLA病院患者図書館ガイドライン2000」¹⁾が翻訳されている。

一方で、図書館員の新たな役割として、利用者に積極的に溶け込んで情報サービスを行う「エンベディッド・ライブラリアン」が注目されている。

エンベディッドとは「溶け込んだ」という意味で、エンベディッド・ライブラリアンとは、「日常の業務において、図書館を離れ、利用者が活動している場から、利用者と活動をともにしつつ情報サービスを提供している図書館司書を指す。」²⁾

1970年代より、米国ではクリニカル・メディカル・ライブラリアン（臨床司書）と呼ばれる図書館員が臨床回診時に資料を持参してチーム医療に参加する役割が見られた。2000年代に入り、特に医学系図書館ではその資料特性から電子リソースや電子ジャーナルが急速に普及したのに伴い、モノの管理から自由になり、自治体や公共図書館、地域、患者会等へ積極的にアウトリーチすること、即ち図書館員がエンベディッド・ライブラリアンとしての役割をより積極的に果たすことが可能となってきた。

2. メディアドクター研究会指標で医療記事を評価する

病院図書室や患者図書室では、医療記事をクリッピングしていることが多い。医療記事の評価は、論文と異なる読み方の視点が必要である。メディアドクター研究会で使用されている指標を紹介する。

メディアドクター研究会とは、「医療に関するメディア報道のあり方を勉強する会です。

それまでの新聞報道の医学関係記事を中心に、米国、オーストラリア、カナダ、香港などで用いられている指標を用いて検証し、「医療者、ジャーナリスト、政策立案者、患者・市民の連携により、医療・保健情報の評価を通じて、患者・市民にとって有益な情報に関する共通認識を形成し、その質を向上させることを目的とします。」³⁾

研究会では年6回程度定例会を開催している。旬なテーマの新聞・雑誌等の医療記事や番組をもとに参加者がディスカッションする。欧米で先行している評価活動の指標を日本に合わせてカスタマイズし、活用している。興味のある方は、Webサイトをご参照いただきたい。

これは記事の優劣をつけることが目的ではなく、一定の評価軸で医療記事を読み比べることで、読み手個々の持つ背景により、同じ記事でも捉え方が大きく異なることを実感できる。このことは、患者図書室において患者サービスとして情報提供する立場にある者として、常に心に留めるべきことだと考える。

謝 辞 貴重な機会を与えて頂いた会の皆様、お聞き下さった皆様に感謝いたします。

参考・引用文献

- 1) 国際図書館連盟 (IFLA) ディスアドバンティジド・パーソンズ図書館分科会作業部会 [編], 日本図書館協会障害者サービス委員会 [訳], I F L A病院患者図書館ガイドライン2000, 日本図書館協会, 2001.
- 2) 鎌田均, エンベディッド・ライブラリアン: 図書館サービスモデルの米国における動向, カレントアウェアネス (309), 2011.9. <http://current.ndl.go.jp/cal751> (accessed 2016-3-09).
- 3) メディアドクター研究会, <http://www.mediodoctor.jp/menu/about.html>. (accessed 2016-3-09).

〈講演要旨〉

患者図書サービス（室）はいま

—健康医療情報サービスの課題と可能性—

「公共図書館における健康医療情報サービスの根付き方」

川崎市立宮前図書館

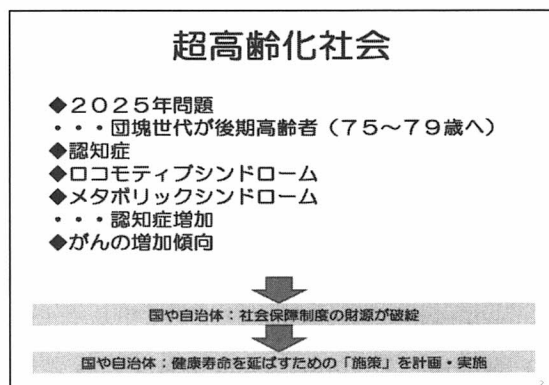
舟田 彰

1 川崎市宮前区の地域性

京浜工業地帯や公害のイメージがいまだに残る川崎。今では、臨海部の工場群は地方へ移転し、メガソーラーや国指定の経済特区に研究機関が立地し、一時期の川崎とは一変した。人口はまだ増加しており、本図書館のある宮前区でも増加している。そして男性の平均寿命が82.1歳、全国第2位という統計値がある。平成22年の統計であるが、高齢化の波は確実に首都圏のベットタウンで進んでいることがわかる。

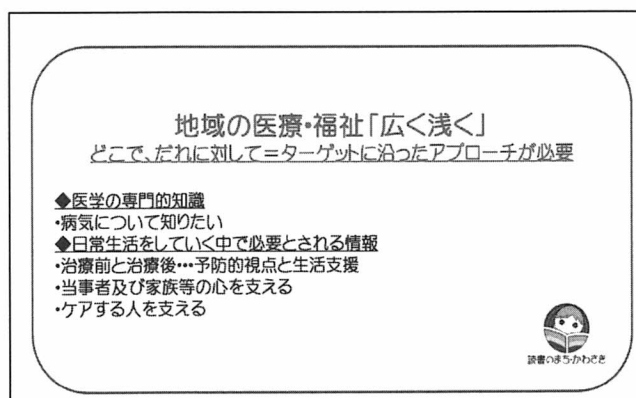
「超高齢化社会」と言われる今日、各自治体では社会保障費財源の破綻を避ける方策として健康寿命を延ばし、住民が健康を意識し、毎日充実した生活を送るための施策が進んでいる。

川崎市【人口】 (2015年9月1日現在)
1,473,658人
宮前区【人口】 (2015年9月1日現在)
225,253人
◆平均寿命 男性 82.1歳…全国第2位(県内第1位) ※川崎市平均:80.0歳 全国平均:79.6歳
(川:77.5歳、幸:79.0、中・高80.0、多81.1、麻:81.2) ◆長野県松川村82.1歳:第1位、第3位:82.1歳
「平成22年市区町村別生命表の概況」から



2 情報源としての一つの選択肢「図書館」

自分の体の健康予防、病気になってしまった時や、治療方針を決めるなど、自分で決定しなければならない場面が多くある。これからの時代は「自分で判断する」自己責任の社会になったのである。その判断をする際に様々な情報を得たいが、どこで情報を得たらいいのか。「専門の相談機関」や「セカンドオピニオン」などもあるが、日常生活の中



で最も身近にある公共図書館で情報を得ることも一つの選択肢として挙げてよい。土日祝日も開館しており、人を介さず「自分で調べられる」。「こんな本ありますか?」とちょっと聞くこともできる。敷居の低いところで調べることが可能なのが公共図書館である。

3 サービスの展開

(1) サービス対象

「医療・健康」に関する情報提供は館種が異なることで違いはあるが、最終的に地域住民へ情報提供することになる。

①医療系図書館：医療従事者・患者 ②公共図書館：市民

(2) 住民のニーズ

以下の内容について、公共図書館などで情報提供する場面がある。

インフォームド・コンセント、患者の自身の治療方針の意思決定権の尊重、カルテの開示—患者自身として理解、患者の権利、病名の告知、セカンドオピニオン、社会復帰後、リハビリをしながらの生活、気持ちを支える情報、闘病や介護をしている、趣味の情報など

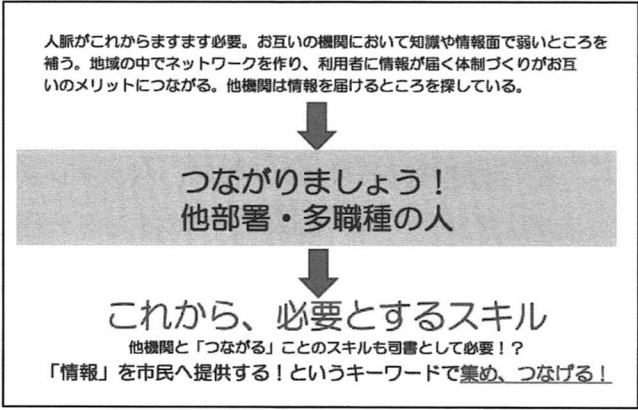
(3) 具体的なサービス内容

主にこのような取り組みを行っていることが、公共図書館などで見られる。

レファレンス、医療健康情報サービスコーナー設置、闘病記コーナー設置、特集企画展示設置、ブックリスト・パスファインダー作成、講演会開催、パンフレットやチラシ配布＝関係機関、書架の見出し整理など

(4) 連携の必要性

このような取り組みを進めるには、公共図書館だけでは情報が弱い。よって専門機関の情報を付加し、利用者ニーズにできるだけ応えられるような情報に加工し、提供することが望ましい。市民へ何を提供することが必要なのかという目的を連携先のお互いがしっかりと認識し、日ごろから



からの人的交流を作っていることが必要である。公共図書館で解決できないレファレンスの場合、医学系図書館司書の人的バックアップがとても力強い存在となるのである。

4 川崎市立宮前図書館での取り組み

(1) 認知症の人にやさしいサービス

川崎市宮前区内には認知症専門病院が2014年に開業され、また認知症の方を対象とした地域交流の場である「認知症カフェ」も区内に複数開設されている。地域ニーズを即し、課題解決に向けた取り組みが地域の中で進められている。健康福祉局を中心とする地域包括ケアの施策が進めており、宮前区健康福祉センターや福祉関係施設では様々な事業が日常行われている。

(2) 川崎市立宮前図書館「認知症の人にやさしい小さな本棚」常設設置

その後、市健康福祉局地域包括ケア推進室職員米館
「地域包括ケアシステムのモデルにしましょう」と！(心の中の声・マジかよ)

■ 認知症コーナー設置「試行的に」
館内や市民との会話から
【材料】: 認知症相談パンフレット・セミナーチラシ、電話、図書館資料

日医大小杉病院「認知症相談センター」 認知症相談パンフ・セミナーチラシ

↑ ↓

図書館「認知症コーナー」設置

↑ ↓

認知症:地域課題

↑ ↓

健康福祉局地域包括ケアシステム推進担当 保健所・患者会


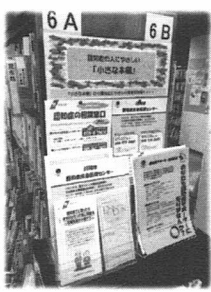
↑ ↓

認知症フレンドリージャパンイニシアティブ

↑ ↓

試行的に「認知症の人にやさしい図書館」の取り組みが始動
(宮崎日立ラ・ス・舞保健福祉センター)

「認知症の人にやさしい小さな本棚」



何らかのシンボルをまず作る！

このような背景をもとに、2015年8月～9月に図書館で認知症ミニ展示を行った。これをきっかけに川崎市健康福祉局地域包括ケア推進室と情報交換を行い、定期的に情報共有している。そして同年12月4日から「情報支援」という視点に立ち、地域の課題解決に図書館としてできることを既存の地域資源と連携し、地域包括ケアシステムモデルの一つとして機能するような取り組みを試行的に始めた。そのシンボルといえる認知症に特化したコーナー「認知症の人にやさしい小さな本棚」を常設設置した。

- ア 図書館内ではコーナーにある資料の貸出。
 - イ 関連機関のポスター掲示、パンフレット配布、市民向け啓発事業の広報。
 - ウ ブックリスト及びパスファインダー作成および配布。
 - エ 今年度、地域のデイケア施設へ資料提供やアウトリーチサービスとして図書館員が読み聞かせ等を行う。
 - オ 認知症に関する理解を深める事業を関係機関と連携し情報提供を進める。
- 以上のような取り組みを実施してきた。

5 さいごに

川崎市では健康福祉局を中心として、地域包括ケアシステム構築に向け動き始めている。市の総合計画が動き始めている。これを受けて図書館は何をすべきかを考える必要がある。その地域性を捉えた上でのことである。

市民が認知症の有無にかかわらず、誰でも安心して暮らせる地域社会の創造に向け、図書館が他のセクターと共にサービスを展開する。福祉や教育という「縦割り」を払しょくし、まずセクターごとの強みを共有し、医療、健康、福祉に役立つ情報を市民へ届けたいと私自身、強く思う。読書支援と共に地域や生活の課題に図書館が「情報」という視点で向き合い小さな取り組みを試行錯誤しながら、よりよいサービスを根付かせていきたい。

〈参加記〉

全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して

亀田総合病院図書室

関 和 美

「患者図書サービス（室）はいま—健康医療情報サービスの課題と可能性—」という魅力的なタイトルに惹かれ、久しぶりに講演会に参加させていただいた。

最初は田村俊作氏による「日本における健康医療情報サービスの現況と可能性」。病院で行うサービスだけでなく、館種の違う公共図書館でのサービスの話は、他館理解という観点において、大変参考になった。現在、サービスの価値が変わってきている、一方的ではなく、win-winの関係性で価値を作り出すという話がでた。これはこの後に登壇した佐藤氏、舟田氏からも出た話である。

公共図書館の新たなサービスについて事例紹介があったが、特に印象に残ったのは、滋賀県の愛荘町立愛知川図書館の「まち残しカード」についてである。自分も地域史を調べているのだが、地域資料というのは、地域を知り、地域の未来像を考えるうえで有用な資料であるのにもかかわらず、図書館における蔵書は少ない。図書館が地域に生活している市民の持つ情報の価値を認め、それが図書館の資料にもなっていく。また、それだけではなく、集落（自治体）ごとの広報紙の収集・掲示も行っているという。上記2事例は、“地域情報を提供したい”という市民と、“地域資料を収集したい”図書館によるwin-winの関係性がそこにもある。ほかにも、市民がタヌキをみた場所を記す「タヌキマップ」作りをおこなっているという。これは気軽に市民が社会参画でき、よい手法だと感じた。情報提供したいと思う市民にとって、図書館は受け皿となってくれている。これはただ単に図書館側が、情報収集をしているだけではなく、市民活躍の場を提供しているとも言えるのではないだろうか。“生きがい・活躍の場を持つ事の出来る市民”資料を充実させることのできる図書館”これこそまさにwin-winの関係性であり、画期的な取り組みであると感じた。この事例は、図書館が直接健康医療情報を提供しているとは言えないかも知れないが、生きがい・活躍の場を作り出すことにより、いきいきと活動できる場、つまり心の健康を保つ場を提供しているようにも思えた。田村氏は「図書館がまちのコミュニケーションの場となっている」とおっしゃっていて、まちづくりに関心のある私は、腑に落ちる講演内容であった。

健康医療情報の話で、国立がん研究センターでの相談支援センター連携の話までは知っていたが、「がん情報普及のための医療・福祉・図書館の連携プロジェクト」逗子市・堺市・浦河町のプロジェクトは知らなかった。図書館と健康課などの行政、医療機関・医療者が協働で行っているプロジェクトは、素晴らしいと感じた。

医療の質に関する研究会についての話も出た。全国50の病院に患者図書室を設置しよう

という患者図書室プロジェクトの存在は知っていたが、作ったあとの支援については気にかかっていた。このプロジェクトだけでなく、患者図書室を作った、その後どうするがで悩んでいる機関は多いように思える。田村氏も指摘されていたが「継続性」というものが、現在の健康医療情報サービスの抱える課題であるように思える。

次に、病院図書館員である佐藤正恵氏の「病院患者図書館とエンベディット・ライブラリアン」。佐藤氏とは同じ病院図書館員でありながら、こうも違うものなのかと思わずつぶやきたくなるほど、そのアンテナのはりめぐらせ方に感心させられた。今回話題に出た「医療の2025年問題とはなにか」「消費者長の機能性表示食品のルール改正」については、よく理解していなかった部分もあり、大変勉強になった。また、「病院図書館員の主な仕事」「医学系図書館員の社会的役割」はあまり意識したことがなかったため、まとめていただき、自分の中でもよく整理できた。そういう状況であるため、演題にある「エンベディット事例」として紹介されるような仕事はしたことがない。佐藤氏ほどまでは無理かもしれないが、まずはアンテナをはりめぐらせることからはじめ、その上で、自分にもできる「より利用者に近い場所で相談サービス」を見つけ出すことができたと思う。

講演の後半に、メディアドクターの指標を用いて、医療記事を評価した。その後、近くの席の方と評価内容に関する情報交換を行った。評価の前に、佐藤氏は「正解はない」とおっしゃっていたが、こういうことなのだろうなと思うくらい、意見がわかれた。そして、情報交換の中で、自分で行った評価と、その病気に直面している人とは受け取り方は違うのではないかという意見がでた。それだけではなく、同じ病気でも様々な視点から報道をされているのだということを感じ取った。健康医療情報サービスはただ「情報を市民へ提供したい」という思いだけではできる仕事ではなく、難しい仕事であると改めて感じることができた。

最後に、公共図書館に勤務する舟田彰氏の「公共図書館における健康医療情報サービスの根付き方」。公共図書館と医療系図書館員など、地域の人々がつながり、お互いの得意分野を活かし、利用者が本当に求める情報を届けることの大切さ。そしてつながりは継続性にも関わってくることなど、とても参考になる話が多かった。舟田氏自身の取り組み、「認知症」の情報を伝えたいと動いたという話などは、地域課題をしっかりと把握したうえでのサービスであり、素晴らしいことだと感じた。公民館で地域課題の講座を企画していた舟田氏だからできるサービスだと思った。そして「試行的にやらせてください」という提案方法も、舟田氏がおっしゃっていたように、“ともに動く相手に安心感を与える”“サービスを実施できる”というまさにwin-winの関係性であると思えた。win-winの関係性というのは、市民（利用者）と、という意味だけではないように思えた。彼のような行政マンが地域にいたら、おもしろい取り組みができるような気がする。

今回の研修会参加を通じて感じたことは、「継続性」という言葉の重みである。

今回の参加された皆様とのつながりを大切にしながら、自分にでき、なおかつ次世代もつないでいけることは何かよく考えてみたいと思う。自分にできることは、とても小さなことかも知れないが、そのことが現在、健康医療情報サービスの抱える課題克服につながればと思う。

最後に、研修会を企画運営し、このように講演会の内容を振り返る参加記を書く機会をくださった皆様に、この場をお借りし、感謝をお伝えしたいと思う。

〈参加記〉

全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して

多治見市図書館

中 島 ゆかり

2016年2月6日（土）に、日本図書館協会研修室で開催された「全国患者図書サービス連絡会講演会」に参加させて頂きました。登壇された三名の方々が（研究者）（病院図書室）（公共図書館）という三者三様の立場からの講演となり、日本における健康医療情報サービスの現況を知る上で、大変有意義な時間を頂きました。拙文ではございますが、講演会で感じた事をお話させて頂きます。

『夜明けの図書館』という漫画本をご存知でしょうか。公共図書館で働く新米司書が情報サービス業務に携わるようになり、利用者からのレファレンスと共に成長していく物語です。第3巻には、主人公の上司が友人の医療系レファレンスを扱うというエピソードがありました。健康医療情報サービスも、漫画に取り上げられるまでになったのかと感慨深く読みました。今回お話を伺った三氏を含め、全国で健康医療情報に携わる多くの図書館関係者の皆様、そして20年に渡りご活動を続けておられる全国患者図書サービス連絡会の皆様のこれまでのご尽力によるものが大きいのではないのでしょうか。

〔講演1〕 田村俊作先生（慶應義塾大学名誉教授）

「日本における健康医療情報サービスの現況と可能性」

研究者の立場からの田村氏のお話は、日本の図書館における健康医療情報サービスの全体像を捉える上で、大変勉強になりました。図書館の役割の変遷（受験勉強・研究など、ある一定の利用者のみの図書館→読書支援活動推進により市民の図書館へ→情報を提供することにより人の営みを支えるまちの図書館へ）から始まり、全国の図書館の先進事例をいくつも伺うことが出来ました。（愛荘町立愛知川図書館のタヌキマップは興味深かったです！）今後、全国の図書館が先進事例を参考に切磋琢磨してサービスの向上を目指す事で、地域の中でさらなる可能性が広がるのではないのでしょうか。そして、公共図書館と病院患者図書室が連携することにより「人がよりよい生を全うするために図書館が貢献できるこ

と」という健康医療情報サービスの可能性がますます広がっていくのではないかという希望に満ちたお話でした。

【講演2】 佐藤正恵先生（司書・ヘルスサイエンス情報専門員上級）

「病院患者図書室とエンベディッド・ライブラリアン：

メディアドクター指標で医療記事を評価する」

「Embed=埋め込む」という意味。病院図書室担当者はこの「エンベディッド・ライブラリアン」として「より利用者に近い場所で相談サービスを行う司書」という役割を果たすことを求められています。それは病院という場所ゆえに求められる役割かと思えます。多種多様な利用者がある公共図書館に比べ、病院図書室はご自身の病気について話しやすい場所であることは確かです。だからこそ、そこにいる司書は科学的根拠に基づく情報を提供することが求められる。医療従事者へのサービスも行っているヘルスサイエンス情報専門員だからこそ可能なことかもしれませんが、専門司書が不足していること、専門職員としての処遇の問題、患者図書室や情報提供のガイドライン作成など今後の課題も山積みのようなようです。市民が健康リテラシーを身につけることが必要となっている現代で、それを支援することも健康医療情報サービスに携わる司書たちに求められています。佐藤氏のお話は、市民の身近で健康医療情報サービスに携わる公共図書館の司書たちにとっても大変勉強になるものでした。残念ですが、この事はまだまだ公共図書館で働く司書たちにとっては弱い側面です。しかし、こうした情報を見極める力を持った司書たちが全国の図書館に増えることで、健康医療情報サービスは日本中にもっと広がるのではないかと思います。そのためには、病院図書室の司書と公共図書館の司書がもっと交流の場を持つことが大切ではないかと思いました。

【講演3】 舟田彰先生（川崎市立宮前図書館）

「公共図書館における健康医療情報サービスの根つき方」公共図書館の現場で働く舟田氏の具体的なお話は「もしかしたら私たちにも出来るのではないか」という希望を与えて下さるものでした。認知症の展示を開始したところから、地域包括ケア推進室との連携へとつながり「地域包括ケアシステムのモデル」事業へ進むお話は、聞いているだけでワクワクしました。公共図書館で行う健康医療情報サービスの原点から、一歩進んだ進化系のサービス（レファレンス、闘病記コーナー設置、特集企画展示、ブックリスト・パスファインダー作成、講演会、パンフレットチラシ配布、書架見出しの整理など）をするためにどうしたらよいのか。そこでキーワードとなるのが「連携」だと、自身の経験に基づく実例から語る舟田氏の言葉には、力強さを感じました。図書館が「地域情報のプラットフォーム」となって、情報はたくさん持っているのに広く市民に知ってもらおう場を探している関係専門機関と、多くの市民をつなぐ役割を果たす場となること。これからの図書館司書に必要となるのは、これらの関係専門機関と市民を「つなげる」スキルなのだという言葉に、感銘を受けました。

前出の『夜明けの図書館』第3巻での健康医療情報サービスのエピソードは、子宮頸がんを再発した友だちに司書として寄り添う事で、自分が働く図書館の健康医療情報サービスの在り方そのものに配慮が足りなかったことに気づいた司書たちが、サービス自体を見直すきっかけをもらうというものでした。その気づきや配慮こそが、多くの図書館が大切にするべきことではないでしょうか。図書館職員に相談したくとも容易く声をかけられない悩みを持つ人たちに、どのような配慮が出来るのか。その配慮が健康医療情報サービスには必要不可欠なことで、優しさや思いやりが、結果として信頼関係を育むきっかけになるのではないかと思います。信頼関係は利用者と図書館員をつなぐだけでなく、組織と組織にも通じることで、連携を生み出す大切な一步になるはずです。

今回お話を伺った三氏に共通する事、それはサービスの向こう側にいる人たちのことを考えながら取り組んでいらっしゃるということだと思います。私たちにもすぐにも実践できることだと、講演会を拝聴して心を新たにしました。とても有意義な時間を頂きましたことに、講師の皆様、運営事務局の皆様、ご一緒させて頂いた皆様に感謝を申し上げます。

参考図書：『夜明けの図書館』（第3巻 第11話「石森さんの腹の内」）埜納タオ著 双葉社

〈参加記〉

全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して

国立保健医療科学院図書館サービス室

宮澤博子

2016年2月6日(土)に開催された全国患者図書サービス連絡会講演会にて、3人の講師による講演を拝聴いたしました。大学の研究職、病院図書室司書、公共図書館司書というそれぞれ異なる背景をお持ちの講師によるものでしたが、今後の図書館の可能性を示唆する興味深い内容でした。

1. 日本における健康医療情報サービスの可能性

慶応義塾大学名誉教授 田村俊作先生

現在の図書館サービスの課題を明らかにしつつ、図書館と利用者が相互に利益のある価値を協働で創造するサービスの可能性と、その取り組み事例をご紹介いただきました。数々の事例の中で愛荘町立愛知川図書館のまち残しカードの取り組みはユニークなもので、町民がためきを見た場所にマークを行い研究に必要な情報収集の一翼を担うというものでした。闘病記文庫のように図書館員が資料をもとに新たな情報を創造し提供すると

いった活動はある程度の市民権を得たように思われますが、従来の情報提供者と受容者とが協働で新たな価値を付加し情報を創出するという活動は初めて耳にするものでとても新鮮でした。利用者は情報の作り手にも受容者にもなり、図書館を訪れる度に研究の進み具合を確認できることは楽しいものと思います。図書館においても日々進化するオリジナルの情報を発信することで独自の存在となることができ、両者に有益になる好い例と思いました。図書館が中心になってこのような活動を続けることができれば、将来、図書館は既存資料のみ扱うという一般に定着したイメージを一掃し、新たな情報の創造者として位置づけられる日が訪れるかもしれないと感じることができるお話でした。この事例の他にも図書館が「人」や「機関」と繋がり協働し提供するサービスの可能性について伺いましたが、いずれの場合も司書が情報に精通し、他者、他機関と積極的に関わるコミュニケーション力を備えることが鍵であり、現状を変え図書館の可能性を開拓していく重要な要素は図書館司書の人間力であると感じました。

2. 病院患者図書室とエンベディッド・ライブラリアン

佐藤正恵先生

エンベディッド・ライブラリアンについてご紹介いただきました。エンベディッド(Embed)とは「埋め込む、溶け込んだ」という意味であり、エンベディッド・ライブラリアンとは利用者が活動している場において利用者とともに活動しつつ情報サービスを提供する図書館司書を指すそうです。事例として病院患者図書室における活動をご紹介いただきました。今後の病院患者図書室における急務な課題の一つは、診療ガイドラインやEBM等の医学情報を取り扱うことができる十分なスキルを持った医学図書館員を育成し配置することで、ライブラリアンは日頃から情報を正しく見極める能力を養う必要があるとのことでした。情報評価については、当日実際に参加者全員で情報評価のミニ・ワークショップを行いました。まずは個人でメディアドクターの指標から2つの医学に関する新聞記事を評価した後、4,5人のグループに分かれて、それぞれが行った評価について意見の交換を行うものでした。新聞記事をいくつかの評価軸から分類しようとする、いずれにも解釈が可能なものや非常に判断が困難なものがあり、急にスキルが得られるものでないことが分かりました。情報の質の見極めについて日頃から意識し自分自身でスキルを磨く努力が必要であると感じました。

3. 公共図書館における健康医療情報サービスの根付き方

川崎市立宮前図書館 舟田彰先生

他機関、他部署、他職種と連携して相互に有益なサービスを作り出すことが図書館の活性化につながる事例として、現職の公共図書館における活動の数々をご紹介いただきました。サービスの提供は図書館内に限定されず、司書は図書館以外のあらゆる場において常にサービスの種を探ることが重要であり、種を蒔き共に美しい花を咲かせるまでに必須なのはコミュニケーションの力であることを実体験を交えて大変愉しくお話いただきました。

た。新たなプロジェクトを行う際、労力に見合った成果が得られない可能性について必ず言及されるものですが、プロジェクトに否定的な立場をとる担当者には「試行的にやらせてください。」という言葉が効果的であるとお話でした。成功するしないにかかわらず数々の挑戦を繰り返し、新たな可能性を探し続ける姿を垣間見た気がしてたいへん励まされました。このような活動は図書館活動の広報の効果もあるのではないかと思います。新たに何かを始めようとした際に、まずは相談してみようと思える頼もしい存在になり得るよう、図書館から発信し続けることが必要と思いました。図書館はすべてのテーマを扱えるいずれとも連携できる機関であると思います。従来にない新たなサービスが提供できる大きな可能性を有していると感じました。

講演会を通じて

このたびの講演は「図書館が他機関との連携により作り出す新たなサービス」が共通のテーマであったと思います。まずは図書館から外に出て何が必要とされているかを知ること、図書館という枠を超えて他者と繋がり一緒に価値ある情報を創出していくことが今後の可能性であることがよく分かりました。またこれらの活動を行う上で必要となるのはコミュニケーション能力であることを実感しました。講演を通して終始一貫、司書は図書館から出て外の世界とつながろう！というメッセージを送られたような気がしました。

図書館は来館した利用者に必要な資料を提供することが主なサービスであり一般的なイメージですが、非営利であるためか、利益を追求する他のサービス業のように積極的に新たなサービスを創ろう、提供しようとする姿勢が弱かったように思います。正しい情報の必要性については誰もが認め、努力しているにも関わらず周囲からの期待が薄いと感ずるのは、これまで行ってきた図書館の活動が社会の需要に十分に合致していなかったためかもしれません。予算や人の削減対象となりやすい図書館ですが、玉石混交の情報社会の中で、正確な情報の価値を理解し取り扱うことができる専門職が必要とされないはずはないと思います。現場に戻ってまずは何から始めようかと考える契機になり大変有意義でした。

また、今回初めて講演会に参加させていただき感じたことは、アットホームな暖かい勉強会であることでした。休日に時間を割いて遠くから来られた参加者の熱意や、情報交換の場として本会を大事にされている会員の方の思いが感じられたたいへん刺激を受けました。講演会終了後、会場に収まりきれないほど大勢の方が意見交換会に参加されていたこともその表れであったように思います。本会について伺ったところ、病院図書室の関係者以外にも大勢が参加できるよう門戸を広げる一方で、創設当時のメンバーが現在も運営に携わり続けているとのことでした。会員の良き礎となり活力の場所となり続けている大きな要因は、創設時の心がそのまま存続しているからなのだと感じました。

このたびは有意義な講演会に参加させていただきましたこと心よりお礼申し上げます。機会があれば是非次回も参加させていただきたいと思います。そしてその際には今回の講演会を通して学んだことを実際現場に反映しているのご報告できるよう活動していきたいと思っております。

<コラム>

「子どもには、ほんとうの生命を」

国立病院機構 富山病院 (小児科医)

嶋 大二郎

故郷の大手ノート・メーカーが作る学習帳は昔から生き物の写真を使った表紙が人気で、全国の学校から大量注文があったらしい。ところが、近年になり「気持ち悪い」と忌避する親から学校への苦情が増え、売れ行きにも影響が出たとかで、製造を取りやめたことが数年前ニュースになった。しかし、反論も根強く、今年になって限定的ながら復活させたことがまた話題を呼んだ。

私は小児科医。「子どもは泣いて大変でしょう」とよく慰められる。現にそういう面はあるし、泣かさずに診る方が得られる情報がずっと大きいのは事実だ。というわけで、いかに騙し、おだて上げて診察に持ち込むかが小児科医の技量と心得ている。手段はいろいろ。机上にパソコンのある現代、私はスライド仕立てで動物や植物など生物の写真を見せ、クイズ形式も入れてこちらのペースに引き込むのが常套手段だ。

さて、そうしていると、ケモノではほぼ問題は起きない。ところが昆虫や両生類になると、子どもは興味津々なのに、傍らで「気持ち悪い」と水を差す母親が近年とみに多くなったと感じるのである。まれに子ども自身が気持ち悪がることもあるが、その多くは「昆虫が苦手」の母の影響によるように思える。

都会の子は自然に接する機会が少なく、生き物が苦手になったと言われて久しい。しかし、今は地方も同じ。県都富山市とは言いながら、外れに位置し、緑豊かな田園・丘陵地帯に恵まれた私の病院にいてさえ、その変化をつくづく感じるのである。暴行や殺人などの犯罪は古来のものだが、近年その数が全国満遍なく増えたと感じるし、何よりもその言い分が「恨み」や「憎しみ」ではなく、「殺してみたかった」などという理解しがたいものが多い。触れた経験が少なく、生命として超えてはいけな一線が分からなくなっているのではないだろうかという印象を持つのである。

飛躍が過ぎるかも知れない。が、私は、生き物も格闘も全てバーチャル化され、直に生命に「触れる感覚」や危害を受ける「痛み」を経験せずに子どもの時期を過ごすようになったことが大きいと思う。スマホもゲームも、今や都会も田舎も時間差無く手にすることを考えれば、身の回りに普通にいる生物を気味悪がる事実も、理解しがたい犯罪が全国等しく増えている現実も、説明がつくように思うのだ。

少子高齢化や環境破壊など私たちを取り巻く危険はいくつも指摘されるが、人間が加速度をつけて自ら生命との接触を断ちつつあることに何より大きな危機感を持つ。

子どもには、人工産物のペットではなく、自然の生命に親しんで育てて欲しい。

全国患者図書サービス連絡会会報投稿規定

1. 本会会員（購読会員を含む）は誰でも投稿できます。
2. 本会報は、患者図書サービスをめぐるいろいろな話題や問題、そしてこれらと関係する論文、報告、資料などを掲載します。
3. 投稿原稿の採否は、役員会で決定します。
4. 投稿原稿の長さは問いません。
5. 投稿原稿の執筆・提出要領は次の通りです。
 - ①用紙は問いませんがワープロソフト搭載のパソコンを用い、また手書きの場合は楷書で編集者が読みやすい文字で書いてください。
 - ②パソコンで作成した場合は、メールの添付ファイルでお送り下さい。
 - ③表紙頁には表題、著者名、所属を明記し、更に、執筆者の所属、郵便番号と住所、電話番号、FAX番号、メールアドレス等を明記してください。
 - ④外国人名は分かるものについては原語を付け、適当な日本語訳のない言葉も原語を用いてください。
 - ⑤原稿に付随する図や、表、写真は図1、表1、写真1などの番号を付け、本文とは別に添付し、本文中の該当箇所に（図1）などと指示してください。原稿を含め、投稿されたものはお返ししませんので、特に手書き原稿に添付する貴重な写真などはコピーをとってください。返却を希望されるときは、その旨お伝え下さい。
 - ⑥参考文献記載の様式
 - i) 記載順序は出处順とし、1)、2)、3)の書式に従って下さい。
 - ii) 雑誌の場合は、著者名、標題、雑誌名、発行年;巻(号);開始ページ-最終ページ、の順に記載。
 - iii) 単行本の場合は、著者名、書名、版表示、(シリーズ名;シリーズ番号)、出版地;出版者;出版年、開始ページ-最終ページ、。
6. 原稿送付先：メール添付=yamamuro@tb3.so-net.ne.jp
郵送の場合は 〒236-0053 横浜市金沢区能見台通16-16 アイネス能見台101 宮田方
全国患者図書サービス連絡会
(2012.7.31 改訂)

[編集後記]

本年2月に開催された講演会の報告号をお届けします。
講演会開催地から遠方の会員の方々にはなかなか参加しにくいこともあり、当日ご講演頂いた各講師の方々から毎回ご講演内容の原稿を頂いております。各講師の方々へは厚くお礼申し上げる次第です。また講演会当日参加された3氏の方々には快よく参加記をお寄せ頂きましたことを感謝致します。有難うございます。

編集部では「会員の声」、「事例報告」など広く会員の方々からの投稿をお待ちしています。

よろしくお願い致します。

(編集子)



電子ジャーナルホスティングサイト

PierOnline ピアオンライン <http://www.pieronline.jp/>

PierOnlineは国内の学術出版社が発行する医学・薬学・看護系の学術誌を電子ジャーナルとして提供するホスティングサイトです。ご利用は提供される電子ジャーナル1誌ごとに年間ご契約が可能です。冊子体（本誌）の非購読者は論文単位でのPayPerViewご購入が可能です。

南江堂オンラインJournalに「最新の治療シリーズ」10誌が追加されました！

「外科」「内科」「胸部外科」「整形外科」「別冊整形外科」「がん看護」の6誌セットがオンラインで閲覧できる南江堂オンラインJournalに「最新の治療シリーズ」が10誌追加されました。



「南江堂オンライン Journal」の特長

- ・増刊号や増大号ももれなく閲覧できます。
- ・同時アクセスは無制限です。複数人が同時に利用することができます。
- ・写真や図も大変鮮明にご覧いただけます。
- ・気になった論文をブックマークして、好きな時に簡単に閲覧できます。

充実したバックナンバー

ご契約と同時に、PierOnline に収録されている南江堂オンライン Journal のバックナンバー全てが閲覧可能となります。「外科」「内科」「整形外科」は2001年から、「別冊整形外科」は2000年から、「胸部外科」は2004年から、「がん看護」は1996年(創刊号)からご覧いただけます。

南江堂オンライン Journal をご覧いただけるのは、PierOnline だけです！

お問い合わせ・トライアルのお申込みは下記まで



株式会社サンメディア

e-Port

e-mail : pier@sunmedia.co.jp

本社 〒164-0012 東京都中野区本町 3-10-3 PORT ビル
Tel : 03-3299-1575 Fax : 03-3374-1410

大阪オフィス 〒550-0003 大阪市西区京町堀 1-3-3 肥後橋パークビル 4F
Tel : 06-6444-7720 Fax : 06-6444-7730



国内最大級の医学文献情報データベース

医中誌 Web Ver.5

デモ版 <http://demo.jamas.or.jp/>

Database

国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊行物のべ約6,000誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1977年から最新データまで約1,000万件。

Interface

直感的に検索できる検索インターフェースをご用意しています。また、医学用語シソーラスや検索履歴を使い、より適合性の高い検索結果を得ることができます。

Link

医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスにリンクしている件数は290万件、うち90万件は無料で公開されています(2016年7月現在)。また、図書館システムとのリンクも行えます。

Customize

大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関連とのカスタマイズ、「My 医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

法人向け「医中誌 Web」

1年間の固定料金制。同時アクセス数2で250,000円(税抜)～

個人向け「医中誌パーソナルWeb」

1ヶ月8時間利用で2,000円(税抜)～

特定非営利活動法人 医学中央雑誌刊行会 <http://www.jamas.or.jp/>



ICHUSHI

〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18

TEL:03-3334-7575 FAX:03-3334-0497 E-MAIL:info@jamas.or.jp



好評既刊



多様性と出会う学校図書館

一人ひとりの自立を支える合理的配慮へのアプローチ

野口武悟・成松一郎 編著

A 5判 184p / 本体：1,800円+税 / ISBN978-4-902666-35-9

学校図書館法の改正などもあり、近年、学校図書館という場を「再発見」しようという動きが始まっています。

本書は、学校図書館が、一人ひとりの子どもの特性や思いに寄り添いながら、自立的な生き方をサポートするための基本的な考え方を提案し、それぞれの現場で「合理的配慮」を実践していくためのヒントやアイデアを提供する書籍です。



からだといのちに出会うブックガイド

健康情報棚プロジェクト

+
からだところの発見塾

B 5判 244p

本体 2,400円+税

ISBN978-4-902666-19-9

図書館員、ジャーナリスト、医療・患者会関係者などがキーワードごとに選んだ「読みたい」「読んでほしい」「棚に揃えたい」絵本・エッセイ・写真集など179冊を紹介。

重版出来



一人ひとりの読書を支える学校図書館

—特別支援教育から見えてくるニーズとサポート

野口武悟・編著 A 5判・222p / 本体 2,000円+税 ISBN978-4-902666-24-3

特別支援学校、特別支援学級、通常学級に在籍する、特別なニーズのある子どもたちに豊かな読書活動を提供している学校図書館の実践を報告するとともに、ニーズに対応したサポート方法・メディア活用例を解説します。

読書工房

〒171-0031 東京都豊島区目白3-13-18 ウィング目白102

電話：03-5988-9160 ファックス：03-5988-9161 Eメール：info@d-kobo.jp <http://www.d-kobo.jp/>

全国患者図書サービス連絡会会報 ISSN 1334-2937

第22巻 第3・4号 (通巻77号) 2016年6月31日発行

発行：全国患者図書サービス連絡会 (<http://kanjatosho.jp/>)

〒939-2692 富山県富山市婦中町新町3145

独立行政法人国立病院機構富山病院・気付

連絡先：Email：info@kanjatosho.jp

yamamuro@tb3.so-net.ne.jp

印刷所：株式会社 中島印刷所

〒232-0026 横浜市南区二葉町4-39

年会費は下記へお願いします。

振込口座 00590-4-9311

加入者名 全国患者図書サービス連絡会

年会費・購読料共 4,000円